



い き い き

小 富 士 っ 子



R 6 学校便り No22

令和 7. 3. 1 8

四国中央市立
小富士小学校

災害を忘れてはならない

2011年の3月11日に東日本大震災が発生し、今年で14年目を迎えました。東日本大震災では最大震度7を観測し、その後発生した津波は10mを超える高さに達しました。被害は甚大で、死者・行方不明者は災害関連死を含めて2万人を超えました。多くの建物が倒壊し、福島県では原子力発電所事故が発生しました。廃炉に向けた工程は徐々に進展しているものの、依然として完了の見通しは立っていません。岩手県大船渡市では、復興が進み、ようやく生活が落ち着き始めた矢先、大規模な山林火災が発生し、再び避難所生活を強いられています。復興の途上で再び災害に見舞われ、



またも甚大な被害を受けています。被災された皆様に心より

お見舞い申し上げます。そして、一日も早い復興を願い、励ましの言葉をお伝えしたいと思います。2004年に発生したスマトラ島沖地震は、死者・行方不明者数が約23万人という未曾有の被害をもたらしました。地震による建物倒壊などの被害もありましたが、被害の大部分は、その後に起きた津波によるものでした。中でもインドネシアの死者・行方不明者の数は甚大でした。インドネシアが震源に近かったことはもちろんですが、被害を増大させた要因として、現地の人々に津波への警戒が全くなかったことが挙げられます。例えば、『地震後に海岸から海水が引いているのを見て、海岸にいた人々が海底に取り残された魚を拾いに行き津波に飲まれてしまった』という衝撃的な報道もありました。せめて津波に対する予備知識や避難行動が取れていれば、被害は軽減されていたでしょう。このような事態を繰り返さないためにも、津波に対する知識を学ぶことと避難訓練の実施が重要です。東日本大震災では、多くの人々が津波の怖さや対応策を知っていたにもかかわらず、被害を免れることができませんでした。それは、津波の規模が想定を上回ったためであり、いわゆる「想定外」であったことが一因です。また、このようなことは起こるはずがない、あるいは自分は被害に遭わないだろうといった思い込み（正常性バイアス）や、災害の規模を実際よりも小さく見積もってしまう心理が働くことによって被害に遭うとも言われています。「天災は忘れた頃にやってくる」とは、時間の経過とともに危機意識が薄れていくことへの警鐘を鳴らす言葉だと思います。私たちは、常に「想定外」のことが起こりうることを想定し、いつ災害が襲ってくるかもしれないという高い危機意識を持つことが大切です。南海トラフ巨大地震の30年以内の発生確率が「80%程度」に引き上げられたとの発表がありました。これは、いつ地震が起きてもおかしくないほどの高い確率を示しています。この地震による津波の高さは、太平洋沿岸で10m級、四国中央市では3～5m程度と想定されています。「瀬戸内海だから」と安心していませんか。3～5mと言えば、決して油断できない高さです。改めて、ご自身の危機意識を確認してみてください。小富士小学校では1年間に何度か避難訓練を実施しています。何よりもまず、自身の命を守ることを最優先とする自助の力を身に付けることを目指しています。危機に直面したとき、周りの人と同じ行動をとれば安全だと考えてしまう「多数派同調バイアス」が働くと言われています。つまり、みんなが避難しなければ避難しないという心理が働くということです。だからこそ、率先して素早く避難行動が取れる人になることも目指しています。皆さんも、災害に対する心の準備と物資の備えが十分にできているか、改めて確認しましょう。